「歴史と共に　～京都・高瀬川～」

１：一つだけ残された舟入

（↑高瀬川・一之舟入　夏の風景）

昔、京都にはこの写真のような船の停留所（＝舟入）が九ヶ所作られた。これらの舟入は、船が運ぶ荷物の積み下ろしと、舟の方向転換の場所であった。しかし、現在、残されているのは、写真にもある一之舟入だけである。この一之舟入が位置している川こそ、高瀬川である。

高瀬川は水量も少なく、川幅も狭い。かつて、ここに多くの舟が行き来し、京都の町中に物資を運んでいたとは想像しがたいだろう。当時の栄えた高瀬川の様子とは違い、現在は静かに川は流れている。しかし、この川を彩る四季の変化は、高瀬川が開かれた１６１４年と変わらず、美しい姿を多くの人々にみせてくれている。

２：高瀬川と私

私が幼い頃は、一つ上の兄と一緒に、高瀬川で遊んだ記憶がある。当時も水量は少なかったが、メダカやザリガニ、オタマジャクシなどがいて、よくバケツなどを持って通っていた。それから、１０年以上経った今、大学が東京であるために、高瀬川を見るのは、年末年始と夏休みの間だけとなってしまった。しかし、高瀬川を見るとホッとした気持ちになるのだ。私にとってなつかしい友達のような存在なのかもしれない。

冬である現在は、桜も咲いておらず、青々とした木々もない。高瀬川の一之舟入には、いつも通り、動かない舟が浮いており、静かに京都の時間を刻んでいる。多くの人が、高瀬川の存在を当たり前のように捉え、この川が何のために作られたかなど、気にしていないだろう。しかし、そこには京都の繁栄と関わる、高瀬川の歴史が存在するのである。素朴であるが、どこか美しく、多くの人を魅了するこの川は、その歴史の深さを教えてくれるはずだ。

３：京都の発展と高瀬川（Web 検索）

● 角倉了以

高瀬川は、豊臣秀吉の許可を受けて安南国（ベトナム）と貿易船を派遣する貿易商であり、京都の豪商であった、角倉了以とその子素庵によって１６１４年に開かれた運河である。角倉了以は、琵琶湖疎水の設計者として有名な田辺朔朗と共に、「水運の父」として有名である。

江戸時代初めの高瀬川は、京都市中と伏見間の物資輸送手段として利用されていたようだ。二条大橋南西には、高瀬川最上流の舟入＝一之舟入が存在し、角倉家は高瀬川の支配権と諸物資の輸送権を持っており、運送業者から手数料を徴収していた。

● 高瀬舟と高瀬川

もともと、高瀬川が作られた理由は、京都の中心を流れる鴨川が、頻繁に洪水を起こしたため、角倉了以が高瀬川を考え出したとされている。高瀬川は、鴨川の水が引き入れられ、全長１０５００メートルにも及ぶ運河となった。その川は非常に合理的に作られており、舟底の浅い高瀬舟に合わせて、浅く作られている。川幅も舟が通れば水位が上がるように狭く作られているのだ。このように、鴨川の氾濫をおさめるために作られた高瀬川は、高瀬舟での運送業を通して、京都の発展に寄与することとなったのだ。

● 物資運搬と経済効果

当時、伏見から京都に向けて高瀬舟が運んだ物資は「たきぎ・材木・炭・米酒・醤油・嗜好品・海産物」などであった。逆に、京都から伏見に向けて運ばれたものは、「たんす・長持・鉄工業製品」などが運ばれた。

このような物資の運搬によって、高瀬川の舟入には上記の物資に関連する、問屋が置かれるようになった。そして、それらの商品を取り扱う商人や職人が町を形成したのであった。その例として、材木町や石屋町、塩屋町など職種や商品の名前を反映させた町名が付けられたのだ。ちなみに、一之舟入が現存する場所は木屋町と呼ばれ、京都では三条繁華街として栄えている。

その後、第二の疎水の完成や、トラック運送の開始などによって、高瀬舟による運送は次第に減少していき、大正９年に廃止されることになった。

＊ 基本的には、高瀬川で運ばれるものは、上記のような物資であった。しかし、時には島流しの罪人や初詣の人々の運んでいたようだ。森鴎外の『高瀬舟』では、島流しにされる罪人を描いた小説として知られている。

このように、高瀬川は京都の発展を支える大きな役割を果たしたといえるだろう。ただ単に、高瀬川によって物資が運送されたのではなく、京都という町に近代化の流れを運

んだのである。川と人々が共に生き、成長した歴史の流れが、そこには存在するのだろう。しかし、高瀬川と人々との間には問題もあったようだ。それは、現在でも問題視されているゴミ放棄問題である。

４：高瀬川とゴミ問題

高瀬川での物資を運送する際に、大きな運送妨害問題となったのが周辺の町からの、ゴミ投棄問題であったようだ。京都町奉公所によって、高瀬川沿いにゴミ投棄禁止の高札が立てられたりした。また、この問題は高瀬川だけではなく、他の川も同様であった。現在、高瀬川保勝会によって河川の清掃がおこなわれているが、ゴミ問題は今となっても大きな問題とされている。

高瀬川は、利用されるだけの存在であってはならないのだ。京都の人々と共に生き、歴史を作った存在として、大切にされるべき存在であるはずだ。自分の所有物でないから、どうなっても知らないという、人々の無関心が引き起こす問題がここにも垣間見られるのではないだろうか。

近年、環境問題が世界的に騒がれており、共有地の悲劇という概念がある。これは、「誰にでも利用できるオープン・アクセスの状態にある共有資源の管理がうまくいかないために、過剰に摂取され劣化がおこること」＝「共有地の悲劇」（参考１）というものである。川は資源では無いかもしれない。しかし、人々の自然に対する無関心な行いは、環境問題という視点に立つと、高瀬川に対するゴミの不法投棄も同じ見方が出来るのではないだろうか。

５：今後の高瀬川のあり方

高瀬側の深刻なゴミ問題を通して、人々の環境問題に対する心がけについても考えさせられる。今後、高瀬川と共に歩んできた歴史を振り返り、人々がより高瀬川という存在を愛するようになって欲しいと思う。ただ昔から流れていた川ではなく、私たちの現在の生活に繋がる歴史を築いた存在なのだということを、今一度多くの人に知ってもらいたい。

高瀬川とは、私にとって特別な存在である。実家に帰る度に、その存在に癒されるのだ。これからも、四季折々の美しさと共に、人々の心に残るような川であって欲しいと思う。

（←高瀬川・一の舟入　春の風景）

＜参考文献＞

１・EIC ネット「共有地の悲劇」http://www.eic.or.jp/ecoterm/?act=view&serial=636
閲覧日・2009 年 1 月 5 日　作成日・2008 年 4 月 30 日

２・高瀬川
http://www.city.kyoto.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/htmlsheet/toshi22.html
閲覧日・2009 年 1 月 5 日

３・人列伝「角倉了以」
http://www.joho-kyoto.or.jp/~hitoden/background/suminokura.html
閲覧日・2009 年 1 月 5 日